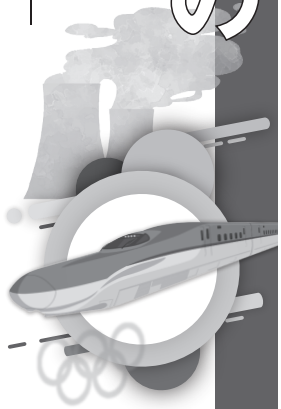


# 高速鉄道の 光と影②

—「計画ありき」の行き着く先—



ジャーナリスト  
榎田秀樹

「リニア中央新幹線」「難民・入管問題」など、大手マスコミが積極的に報道しないテーマで孤軍奮闘している。ライフワークは、熱帯林開発とパーム油の問題。

## 汚染される大地

二〇二二年十一月九日。北海道ふたみ二海郡八雲町は朝から小雨が降っていた。

北海道新幹線のトンネル掘削現場の近くでは、トンネルからの湧水が白濁して地面を流れていた。

「自然由来の重金属で汚染されているかもしれません。今日は雨だから流れているけど、晴天ならこのあたりは舗装路は汚染残土の粉じんまで真っ白に染まります」

こう語るのは、北海道新幹線の建設工事が招く深刻な環境汚染をつぶさに観察し、撮影し、発信している稗田一俊（73歳）だ。



渡島トンネルの建設現場では、トンネル湧水が白濁して地面を流れていた。ブルーシートをかけているのは要対策土

流では水流が砂利を押し流し、特に増水時はより大きな石までも流されてしまい、徐々に河床が下がる。す

稗田は大学卒業後の一九七三年、水中撮影専門の映画会社に入社したが、翌年にはフリーカメラマンとして独立。七七年には、会社員時代も訪れた八雲町の遊楽部川を再訪し、サケの自然産卵の撮影に入ったのを機に、その自然に魅了され町に移住した。以後一貫して、北海道の川魚や森の生き物の撮影に邁進している。稗田が北海道の川に違和感を覚えたのは八〇年代後半に入ってからだ。たとえば遊楽部川では、少しずつ魚がいなくなっていた。釣り仲間からも「あちこちの川の川底が下がってきた」「川岸が崩れて崖になっている」との話が伝わるようになる。

原因はダムだった。ダムができると、本来下流に供給されるはずの砂利がダムに溜まる。するとダムの下

ると川岸との落差が開き、川岸が崩落する。川岸が崩落すると、土砂が流出して細かい砂や泥が川底に堆積し、川幅が広がる。そういった川の悪循環が魚の産卵を阻害するのだ。

問題を伝えようと二〇〇六年に発足したのが市民団体「流域の自然を考えるネットワーク」（以下、流域ネットワーク）だ。稗田は記録担当を担っている。

その流域ネットワークが一五年ころから情報発信に努めるのが北海道新幹線だ。トンネル工事で排出される残土（建設発生土）が北海道の大地と川を汚染しているからだ。

### きわめて杜撰な管理

北海道新幹線は、青森県の新青森駅と北海道の新函館北斗駅間（約二四九キロ）が一六年三月二十六日に開通した。

その四年前の一二年、延伸区間である新函館北斗駅と札幌駅間（約二二キロ）の事業実施計画が認可されていた。延伸区間の七六％はトンネル。新幹線を建設する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構